

Title	谷口知平著『親族法』
Sub Title	T. Taniguchi : The law of family in Japan
Author	田中, 實(Tanaka, Minoru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1954
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.27, No.10 (1954. 10) ,p.81- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19541015-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19541015-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



法付則により除かれている(民法八五八條三項。本條改正については、拙稿『民事法ノート』法學研究二三卷九號参照)。これらは、おそらく單純なケアレヌ・ミス・テイタによるものであろうが、讀者をして不測の誤りに陥らしめる恐れがないでもない。再版の際には是非改めて頂くことを望むしだいである。(評論社發行、B6版二〇九頁、價二二〇圓)

(田中實)

N. Riasanovsky :

### Russia and the West in the Teaching of the Slavophiles

1952, Harvard University Press.

リヤサノフスキイ著

『スラヴ派の教説に現れたロシアと西歐』

最近、ロシアの政治思想乃至社會思想の研究を意圖した二・三の新刊書を入手した。例えば、R. Hare の *Pioneers of Russian Social Thought*, 1951, Oxford University Press 及び S. Tompkins の *The Russian Mind*, 1953, University of Oklahoma Press などがそれである。改めて述べるまでもなからうが、一九世紀ロシアの政治状況は、社會時評はともかく文學的創作・文藝批評・哲學的思想すらもがすぐれた政治的發言であることに存在理由を見出していた程に、又實際そうした知的活動こそが僅かに許

された合法的な政治的實踐であつた程に、強い變革的な性格を帯びていたのである。それ故にか、内容の多様さ複雑さにおいても極めて特異な一九世紀のロシア政治思想は數多くの思想史家の研究對象となつてきた。今後ますますこうした傾向の衰えることはあるまい。しかもソ連邦において例えばチエルニシェフスキイ、ラヂシチェフなどの著作集等が相次いで刊行され、その結果この種の研究に伴う資料的な障碍も次第に除去されようとしている現在、諸外國における新しい研究書の紹介が何かの參考にもなればと考へて、ここにリヤサノフスキイ著「スラヴ派の教説に現れたロシアと西歐」を取上げてみた。

本書は六章二三頁からなる本論及び appendix—Khomiakov's History and Friedrich Schlegel's Philosophy of History—と bibliography とから構成されている。次ぎにその敘述内容を素描してみよう。

一 西歐から受けた思想的影響を無視するとロシアの政治思想乃至社會思想の發展を正しく理解することは不可能となるが、スラヴ派自身が「ロシアと西歐との思想的關係と云ふこの面倒な問題」について既に解答しているので、本書が研究主題とする「スラヴ派のイデオロギー」の本質は、何によりもその解答を中心的な問題として考察することにより正しく追及され把握され得るのではあるまいかと、著者は問題點の所在をまず明らかにしている。しかし一般に西歐派と對置させてスラヴ派と呼ばれた一九世紀ロシアの一つの思想的系譜——「スラヴ派のイデオロギー」そのものの究明は第二章